

か大社参りとか致し其道筋乞に應して（あり其道々本教を宣布致されし道の講釋或は禁厭を施されたる由なり）内著るしき（一説には堺とも云ふ）御席を勤められし時参拜人の内一人居残りて江田氏に向ひ私義は年來 鯰商を營み居りし所或時池の主かとも思はるゝ程の大なる鯰を買ひたるに餘りに大き過ぐる故如何はせんかと思ひつゝも籠に入れ置さしか其夜の夢に最も恐ろしき人顯れ我は今日當家に買はれし鯰なり我目下懐胎の身なれば四五日間程命を助け玉はれ子を産みたる後は直に歸り來るべしと云へる夢を見て奇異の思をなし翌朝家族へ語りしに不可思議にも一家人残りず同様の夢を見しといふ這是彼の鯰の告げなるへしとて其鯰を放ち遣しけるに五日目に至りて曩の鯰胴丸籠（籠）の側を捲き居たり総て鯰は朝は日の出に向ひ日を慕ふものにて至て執着の念深しと聞きしに今此の有様を見て甚快からす斯かる執念の深き鯰を日々料理し況して其料理の度毎に多く眠に雖をさし脊割をする等慘刑を極むる殺し方ゆへ全く其崇りにやと深みふと感したるか其後風と兼て寵愛せる娘が眼を煩ひ出たし追々重く成り色々療治すれども薬功なく果ては兩眼共潰れ難澁致して居ります是も鯰の崇りかと思ひます就ては是迄仕來りの商ひにて今更癢るは大ひに損亡なるのみならず仕馴れざる商買を始むるは甚不得策の事なれども崇りには代へられず已むなく商買換をする考へてあります然るに此頃先生の御

は代へられず已むなく商買換をする考へてあります然るに此頃先生の御

入に成り盲者も眼を開き種々の片輪も治りしと云ふ尊ふとき噂の市中に
 高きを聞き斯かる因果なる娘も御蔭を受けらるゝにやと思ひ参拜し先刻
 より御講話を承り誠に難有く存しませするゆへ尙御教に預り度しと申述へ
 けるにぞ先生云はるゝには御咄の赴一應は尤の様なれ共我が先師（教祖
 事）の御教は第一人の徳を知るが初めにて人の心と云ふ物は勿躰なくも
 天照大御神の御分靈と申して銘々我が物の様に思へとも決して我が物に
 めらず則ち大御神の御心なりと知りて仮にも其心を傷めぬ様致し日々の
 御神恩御國恩親の恩の難有ことを思ひ知り我が我れと思ふ我れなる物を
 一切離れなば即ち日大御神と一体なるが故に万物の靈とも長ともいふな

り先師の御講話中に或人が明石邊の濱を往きける時大きな鯛を曳網に
 て捕へ居るを見て其鯛を買ひ受け元の海に放しやり善き事を致したりと
 思ひけるしかるに其後其人火熱を發して大に苦しむ醫の診察を請けしも
 何病とも定まらず心配の餘りに占ひなを致し貫ひしに是は生物の祟りな
 りといひしとかや抑人は万物の靈にして海川山野のもの生とし活けるも
 の皆人には従ふものなり故に魚類や鳥畜類は人に食はるゝとなしたるも
 のにて右の鯛も人の喰ふ可き爲に天より御擬作ひに相成しを放ちやりた
 る故歎ばずして却て崇りしならんましてや家業の爲め鰻を料理するとも
 夫れが爲に人に崇るものにあらず夫れよりも鰻を買買するに正直を主と

して磨へは賣る時は九拾五匁を以て百匁となす様の事のなき様にし其上
燒き様に心を用ひ味ひを能く付け成るべく薄利を以て商ひ來る客人を神
様の様に心得可憐に取扱ふか肝要でござる若しも不正の事を爲し一旦の
利欲に迷ふ時は夫れこそ商賣の名利に盡きて天より祟を受べしと懇々諭
し玉ひければ主人は大に感じ其翌日先生を招待して御祈念を戴き尙信心
の仕方等を厚く諭し玉ひ夫れより先生は大坂を立出伊勢へ參宮せられ其
道々所々より招待に會ひて一ヶ年余を経て又大坂へ歸られ或日右の殿屋
を尋ねられしに前年に異りて家宅の普請も美麗なりける故他の家にはあ
らずやと思われながら内に入ると主へは亭主を始め家内共奥より走り出て

是は先生様其後は何れへ御越し被成しか顔と御出先き相分らず夫れ
ゆへに御不沙汰致しまして濟みませぬ先づ奥へ御通り下されと申て奥へ
案内し茶菓など出しなごする内先年は盲目なりし娘も出で來り誠に昨年
は有難き御諭を受け信心を旨とし誠を以て商賣を勵み居りましたる處御
覽の如く娘も此通り眼病平癒致し且つ仰に従ひ得意先きを大切に取扱ひ
し故にや來客も多く日増に商賣繁昌致しまして仲買の手前は是迄現金拂
ひなりし所も後金拂ひにて諸方より澤山送り來り一時に澤山買ひます故
相場は安申せば人の御金で商賣をする様な譯で御客の増すに連れて以前
の宅では手扱に付止むなく建廣げ斯様に新らしく相成雇人も大勢使ふ様

に成りまして日々難有くと存し信心を手厚く致しますれば致します程
 する事なす事思ふよりも能き方に運ひます故家内共と咄しますには是程
 の尊き難有事をなせ信仰せぬ人が有るのであるふか病は治る身代は能くな
 る家内は陸敷なる是が蓬萊國といふものでかな有ふかと日々難有存じま
 するに付けて先生様の御恩は忘れてはなりませんと申て居まする種々馳
 走をし長く逗留を願ひたれども先生にははや一ヶ年余も他出の事故歸國
 は急かれ一兩日滞在の後尙も信心は怠りざる様に諭し置かれて大元へ歸
 られしとなん

◎教祖神の御講辭を蒙りて癆瘵全癒す

備前國和氣郡尺所大森武助四十歳計りの時(天保二二二)年(頃)勞瘵病に罹りける
 が素封家の事なれば治療は素より祈念祈禱等何くれとなく財を厭はず百
 方手を盡せしも更に其効なく病勢益募りて如何とも詮術なく金銀にて買
 はるべき物なりせば氏が當時の勢力にて何の自由ならざる事かあるべき
 黄金の山を築くとも此の病癒さしめ玉へと有名なる醫師達に依頼もしつ
 其道に長じたる人々は我こそは争て回春の功を奏してんと治療をさく
 遣る處なかりしも病魔の襲撃は時ありて人の方にて如何とも施すべき術
 なく次第に頼み少なくなり行きて今は最早死を待つのみなりし然るに津
 高郡白石の人某の曰へるには御野郡上中野に黒住と云へる人あり其人の

靈 驗 集

御講釋を聞き御禁厭を受くる時は如何なる難病も治せざることなし此人に依頼しては如何ぞとすくめけるにより武助氏の母人より直ちに土倉氏の(池田候)家臣なる齋藤茂左衛門岡山藩士河野佐十郎の二氏を紹介して教祖を招待し奉りけるにその教祖は其請に應じて同氏の宅に御出あり病床に臨みて禁厭を授け玉ひ尋て一席の御講辭ありければ武助氏難有く肝に銘して覺へけるにぞ此の一坐の御講釋にて深く御道を尊信するの心を生じ随つて斯かる不治の大患一時に淡雪の消ゆるが如く漸々と快方にもむき數十日を出でざるに全快せり夫より益御道を信じ神徳の尊き事を衆人に諭しつゝ猶毎月五日間教祖を招待し奉りて遠近の人々を集め或は

靈 驗 集

病患者等と呼び寄せ毎日四回つゝ(朝晝)御講釋を請ひ奉り御滞留中に御猶寸暇あれば道の御話を拜聴し往々夜を徹して雞鳴に至れること多く御寢食の暇もなき程なりしとぞ斯くて神徳靈驗大に顯れ本教に歸向するもの日々多さを加へ遠近を風靡しつゝ教祖の同氏へ御出坐の時には常に來集の人と以て同氏の宅を充たされたりと武助氏は天姓孝養に厚く又廣く衆を愛し貧民を救ひ凶年饑歲には郷村を振恤し公共事業あれば大に力を盡す等慈善の業に心を用ゐしに由り官よりこれを賞せられし事しばしばなりき御道を尊奉せられし以後は商業上に於て利益を得る事多く一家内は無病壯健にして家運益繁昌なりし教祖は氏を愛撫し玉ふ事深く氏

も亦教祖を慕ふ事赤子の慈母に於けるが如く然れども氏が教祖の御講釋を拜聴する時は常に恍りくんと睡眠して恰も耳之を聞かざるものゝ如くなれば人々氏が本教に熱心せるにも抱らす此の如くなるは如何にとて怪しみけるが後に御講釋ありし事どもを氏に問ひ試みれば細大洩らさず総へて記憶せり殊に其妙所に至つては尤も之を玩味して道の真髓を得たる處多し此の時は世上の毀譽交も本教に集れる際なりし故同氏の知己親族等より忠告せる人々多く皆曰く黒住は卑賤の社家のみ斯かる淺薄なる神道に心酔せしは無學の故なり嗟むたる名家の主人たる者の宜しく爲すべし業は非と諫めしものも多かりき氏はこれに答へて否とよ余は無學なれば

ばむと此の大道を早く悟りて大病も一時に全快することを得たるなり心は物なく天に任かすること道の本意とする處なれ又従つて幾百人か御蔭を戴きたるは余の一信より發せし誠なりとて夫より進んで神徳の高大なる所以を懇々と説かれしかば初め忠告せし人々はかへつて御道の高大なるに感じ氏の誠心に化せられ遂に道に入りし者も多かりしとぞ其人々の一二を擧ぐれば和氣長谷川孫兵衛河本森文左工門氏等は就中篤信の人々なりし教祖大國氏の専心なるを賞し王ひて左の御直筆を賜はりたり

天心

弘化三年六月朔

黒住左京藤原宗忠六十七歳書御判

◎三年の壁神徳により平復す

安政五年の頃讃岐國那珂郡九龜字新堀に鳥尾礪助と云へる人あり同人は
 舊九龜の御倉掃除番を勤め居りたりしが或月倉の掃除を終り宅に歸らん
 として倉の間を通り掛りしに突然惡犬飛び出で同人の足部に喰ひ付きた
 り大に驚きて矢庭に犬をば追ひ除けしも傷み甚しく種々治療を加へしか
 ども其効なきのみならず追々差重り其後三年の月日を覺にて過せしか先
 年全人姪の齡なる人備前國兒島郡福田新田字中畝赤澤京造と云へる人の
 妻となり居りたるが肝癆の病に罹り惱み居たりし際全村佐藤英次氏宅に
 て本多應之助先生の講釋禁厭を戴きて神徳を蒙りし事を聞き斯く難症の

易々と平癒せしは不思議の至りなり實に御神徳は人智の及ぶ限りにあ
 らず尊きものにして吾等の壁とても一心決定して御蔭を戴きなは何んぞ全
 快せざる事あらじと風と本教尊の心を起し直に右本多應之助先生を招
 待しけるに本多氏は佐藤其外隨行員等と共に同家に至り講釋禁厭二晝夜
 の間勤められしも其効毫もなし茲において本多先生思へらく該地は前に
 少しは本教の故門人布教せし事ありしも別に信者なる者なし吾今此儘に
 て當地と去るは御神慮に對し恐れ入たる次第なり又此地に斯く來りしも
 私の爲に非らず全く神明の命せらるる所なれば丹精を抽んで神徳を顯
 影せざるべからずと一心を定め信者共と相謀り神床に向ひ一心不亂に祈

誓し右磯助に禁厭を授けしかば多年の間足部自由ならざるものが少しく
動く様になり尙數日の間幾度となく誘ひ歩ましめしに遂に三町余もあ
んかと思ふ湯屋に連れ行きしも除々と歩行して入浴を終へ無事に我宅ま
で歸る事を得たりと其后日を追ふて漸此快方に向ひ遂に全癒せりとぞ

蔭の禁厭にて蘇生の神庇を蒙る

因幡國鹿野の里なる土屋辰右衛門氏の子息辰藏なる者連年の重病に罹り
て醫療に手を盡しけれども其驗しなく父母の心勞は申すも更なり一家親
類の人々も手を代ゑて名醫といふ名醫は招待せざるはなく或は加持に或
は祈禱に兼て財産家なりければ争かて愛子の病氣を治癒せしめんものを

と有るに任せて金錢を吝まらず種々様々に心を碎きけれども其申斐なく今
は玉の緒も頼み少なくなり行きければ兩親の悲嘆は見るに忍みず枕邊を
取り圍みて咽ひ泣くのみなりしか病人は遂ひに一線の蟲の息ささへ今は
聞へずなりければ兩親は覺へず聲を擧げて叫ひけるにぞ此時勝手に居合
せし本教の信徒某なるもの此体を見るに忍みず折節河本務氏鳥取城下に
おいて布教せられ醫療の驗なきものも禁厭の下立所に御蔭を受けしもの
續々として多々なるを聞き居りしかは直に走りて河本氏の許に駆け付け
しに今しも信徒に對して説教の最中なりければ其由を告げて已に死しな
んとする病者の禁厭を授け玉へと哀求して已まざりしが務氏は更らに一

身を淨め神床に齋き奉れる

天照太神の大御前に拜伏し祈念を凝らし神言を奏し蔭の禁厭を授けられけるにぞ信徒は喜びて直ちに禁厭を奉持して飛ぶか如くに馳せ歸れば病者は已に事切んとして一家は陰々として燈の消へたるが如く涕泣の聲内外に充ちたり某は務先生の賜りたる御禁厭なれば是非一度戴かすべしと言ひけれども親類どもには最早すでに事切れたるものに神符を戴かしむること神明に對し奉りて汚穢の恐れあれは如何あらんと拒みけるを兩親は兎も角も尊とさ御禁厭なれば戴かしてよと涙と共に請ひけるゆへさればとて今や息引き取りたらんかと覺しくて衣打ち蔽ひたる死生の間一瞬

の中に猶祥ひつゝある辰藏の襟元へ禁厭の靈符と載せつゝ暫時の間家内一同信を凝らして枕元へ詰め居けるに病者の天命未だ盡さず一同の信心と河本氏の至誠と相共に神明に通しけるにや辰藏は壽の下より何にかあらん發聲せし如くなるにぞすは病者の生氣付きたりと言や兩親は覺へず聲を放ちて喜び泣きに泣きける辰藏は枕を擡げ我は不幸にして一端落ち入りしと覺しくて何事も覺へざりし今は何となく心地清々しく此様子なれば最早死する事あるまじと聲も涼しく言ひけるにぞ家内一同は唯難有しと感涙を拭ふのみにて其喜びは何と譬へん言葉もなく今までの陰氣は一變して陽氣家に充ち神言の聲勇ましく夫れより日ならずして元氣も次

第一に回復しける其后辰藏は兩親に向ひて言ひけるは私は已に一旦死したるものゆへ今日は黄泉の國の穢れを拂ひて更らに日の神の御蔭を蒙り奉りたしとて浴を命し身體を沐浴し五里の途を鳥取城下に出で河本氏の旅寓に至りて再生の喜びを述べ神明の恩賚を感謝しけるが其夕の講席には自から講座の正面に立ちて自身か目の當り蒙りたる赫々たる靈驗の次第を述べ且つ説き且つ泣きつゝ神恩の高大なることを只有りの儘に語りければ満坐の信徒聽衆は孰れも其身其儘の靈驗なれば嗚ら有難の神恩や天照太神の蒼生を活し玉ふ御徳の有難さ尊とさよ斯かる大道を世の人々に知らしめ思ひ辨へしめ玉ひし黒住先師の御徳は海よりも深く山よりも高

く我々は愈よ益赤き真心を振り起して斯道に邁ひ奉らざらめやと遠近より神文を捧げつゝ教旨に歸向するもの是れより引も切れざるに至りける

◎迷夢覺めて長病一時に全癒す

明治三十二年河本務氏因州へ布教せられし當時鳥取の城下丹后屋へ寄宿せる京都の産婆屋茂兵衛なる者十ヶ年來の長病の處或日風と舊症差起り醫療を乞ひ腹薬すれども其効なく遂に河本氏を招待するに至れりしか同氏は其請ひに應じ同旅宿に到られ神床に額きて一心不亂に神言を奏して後病者に對して神徳を説き禁厭を授けられ夫れより同家に滞留し數日の間神言を奏し禁厭を授け説教を勤められけるも病者は依然として舊の如

少しの功驗も見へざるにぞ茂兵衛は初の程こそ人々の勸むる隨にく
 信仰の心も最深かくりし様なりしか十日と立ち二十日と日を経るまゝに
 自然と倦み怠るの色を來し最初に張り詰めし信仰心も自然といつとなし
 に薄らぎ行くか如き有様に至りしかは務氏は竊かに思へらく病者をして
 斯くの如く懈怠せしむるは全く我誠心の未だ至らざるの致す處なり斯く
 ては御神慮に對し奉り實に恐懼の至りに堪へざる次第なりと自から一大
 勇猛の心を振ひ起し神前に黙禱して丹誠を凝らすこと數日なりしか此際
 近傍の信者中より務氏を請待する者ありて屢々人を介して請しけるにぞ
 一日務氏は御神號をは丹後屋の神床に齋き祭りつゝ病人茂兵衛に禁厭を

授け扱て言はれけるは余は貴殿の爲に誠心を凝らして御祈念禁厭を授く
 ること茲に二十一日なり然れども未だ御蔭を蒙むるに至らざるは貴殿の
 一念尙疑ひの雲霧に繞はれて臆病と云へる病魔の御身に祟りをなし居る
 を以てなり今日は必らず
 天照太神に任かし奉りて一足なりとも病床を離れて余の後より参らるべ
 し夢々疑念なく斷々として病の根を絶ち切るの決心肝要なりと言ひ捨て
 置きて迎への人と共に信者の宅へ出て行かれたり扱務氏は信者の宅にて
 神床に向ひて御祈念ありて暫時の間休息せられける中に同家の玄關口に
 來りて大聲に案内を請ふ者あり尋ひて家人は務氏の前に出來りて菱屋茂

兵衛さんか只今當家へ参られましたと申すに、務氏も先刻まで尙病床にありて御蔭をも受け得さりし身のさては余か最前論したる一言を真正に受用したりしよなア有難や最早御蔭は受け得たるぞと覺へず走りて玄關口に出られければ數年の長病に足腰も立たざりし病人の顔色は見る影もなく憔悴したるも氣分は勇ましく微笑を含みて内庭に立ち居たりしかば務氏は愕然として驚きつゝ喜悅の餘りに落涙に暮れて暫時言辭も無かりしが直ちに其手を取りて神床の前に誘ひ至り居合せし人々にも然々なりと披露して一同御禮の神言を奏したりとぞ

◎産婦御陽氣の御蔭を受く

大坂市東區玉造町字西玉造番外四百六十五番地

星 島 大 次 郎 妻
星 島 春 子

本人去る三十年十一月六日梳車にて壹里餘りの處へ行きたり産前故乗車は如何のらんかと思ひしも急用ゆへ致方なく先方へ到り歸途は歩行したれども歸着の後も何の障りも無かりしにより先喜はしき事なりと安心の折柄俄然大に腹痛を發し苦痛甚しく動もすれば絶息せん様子なりしかば主人御神前に向ひ御祈念致し御禁厭を授けんとせしに腹部の半面は甚高く半面は無きか如く高き方は石の如くなり居りしかば甚だ驚き鎮魂の御陽氣を吹き掛け謹んで禁厭を授けたれば御蔭に依り腹部の全面は眞直に

二百四
なりたれども免角上に付く様子にて絶息の氣ざし絶へず苦しむ事言語に盡せず依て翌日擴誠講社講頭眞弓講義を招請し御祈念を願ひ御禁厭を戴きたれば御蔭立所に顯はれ今迄は絶息せんとして苦しみ居たりし者直に苦悶を忘れたるか如く眞弓講義の教語を拜聞し且つ其身も咄などする様になりたり夫れより日増御蔭を受け身体も常に復し日々家事をも執り居たり然るに十一月中には出産の月數なりし故に今や〜と待居たるも其月も過ぎ十二月となりても出産せされは前述乗車の節の事共を彼是思ひ種々心配し居り胎兒の居所始終上なりしかば是れまでとは腹内の様子異り爲に身の苦敷事云はん方なくされど兼て御陽氣を充分に戴き居たる

爲日々勤めに差悶る事なく誠に難有く日々を暮し居たり同月廿日の夜本人は御神前にて御拜中風と心中に思ふには斯の如く日々御陽氣を戴き居るも尙未だ御陽氣の足らざる故に苦惱するならん今一層御陽氣を戴かば身體安らかなるを得んと我れを離れて御陽氣を戴きたれば腹中何となく氣分よく胎兒も下に降りたる様子にて直に産氣附たりと言に依り長男直哉は直ちに主人の勤務先きに馳せ至り右の様子を報したり主人は壹里計りの處を急行して返り見るに産婦は平日の如く咄などし居たりしが様子を問へば出産未だなりと云ふ依て御神前に向ひ御祈念禁厭を授けたるに十二時に至りて安々出産したり其産兒の胞衣緒を臍部に壹卷卷て其余れ

る緒にて首部を二ツ巻居たり限りある胞衣緒なれば産兒は母の身軀に附
 着し居たれば胞衣も出産の女千産婦とも誠に壯健なり翌日醫師に右の次
 第を語りたるに醫師の曰く夫は余程難産なり首部に胞衣緒を一ト二ツ或
 は三ツも巻けるは時にありとは雖も腹部に巻て首部二巻も巻けるは余り
 無き事なり且又産兒の無事なるは誠に不思議なりと云へり此全く神徳の
 然らしむる處尙又不思議なるは右産兒は誠に大丈夫にして然も十二月廿
 一日午前一時の出産なれば誠に冬至の御日柄なり依て格別丈夫ならんと
 人々言合へり御陽氣を戴きし御蔭を世の人に知らしめんと欲す

編者曰教祖神は冬至の御日出に御陽氣を御戴きになりて積年の御病痼

朝日に霜の消ゆるがごとく消へうせて天地生々の靈機を自得し給へり
 とぞ赤木忠春神の御歌にも（死なうかと思ふ心を嘘と出し活し通しの
 日の神を呑め）とあり教祖神は怠らず御陽氣を吸へよ教へ給へり尊き
 事なりすや

◎難を得て幸福の神座を蒙る

大坂市南區戎橋南詰新榮堂事新庄長之助は從來餅屋を業とせしか明治三
 十三年舊八月十五日例によりて月見園子を賣出したるに如何なる都合な
 りしか其餅を食せし者は腹痛を起し或は下痢に罹るもの等約八百名の多
 きに至りたるにそ南警察署に於ひては健康を害すべき飲食物を販賣せる

ものとして一時營業を停止し本人を召喚して種々取調へ府廳衛生課より
も數名出張して原料及び餅を携へ歸り之を分析したるに別に有害物と認
むるものも發見せざるにより右は同人の所爲にあらざるものとし營業停
止を解さたるも長之助は天性正直内氣なる處より斯くの有様なりしを大
に心配し我店より一時不名譽を擧げたれば此の儘にて舊業を營むも繁昌
する見込みなしと思ひ込み又他に新業を營むも手慣れざる業は永續覺束
なき限りなればどの心配より遂に外聞わるしとて日夜一間に引籠り居り
たりしこの事は當時東京大坂諸新聞に委しく掲載せられたり初て其後長
之助は種々思案の末思ひ迫りて斯く永りへて生き耻と曝すよりは寧ろ海

川に身を投するか又は鐵道轢死を遂げて死するが増ならめと決心し其心
を女房にも語り出てければ斯くと聞く女房兒は身も世もあられす泣き悲
しみ居けるを近隣に噂高まりて難波新地中筋なる本教信者楠かめ女の耳
に入り其は心得違なり心狭きの致す處なりと色々と言説さ勸めて西區北堀
江高臺橋なる本教の堀江説教所へ參拜さすととなしたるか所長松田中講
義は長之助に問ふて曰く貴公に於て有毒物を混合せし覺ありや彼は答
へて決して其覺にはありませぬ松田氏曰く覺はかなければ神は見通しな
り本心は神なれば本心に一点の曇りなければ神に對しても耻づる所はな
きなり神と我の本心とは一体なるを以て本教にては本心を御分心とも天

心とも申すので神に耻じざることは如何様の噂かたつとも一時のことなり徒らに貴重の生命を抛つべからずと懇々論されたるに天性正直の人なれば毫も疑はず其説論に服して生命財産は天の物即ち天照太御神のものなり我儘に擲ち捨るは神に對して不忠不孝なりと納得し是迄の不心得を松田氏に謝し天照太御神に謝し更らに生れ變つたる心地になりて從來の如く舊業を営みければ世間の人々は無失の難に罹りたりとて却て氣の毒に思ひ開業當日より講求者は店頭に山を築きたれば大坂第一の場所柄とて一層評判も高く前日來の新聞と世間の噂は却て商賈繁盛の廣告と變し心氣清々しく長之助は夢にはあらざるかと思ふ許りに大に喜び又本

教の難有さを悟り佛式を改めて神式の祖靈となし神文奉呈の爲め松田中講義に従ひ岡山宗忠神社に參拜したるは全年十月二十二日即ち獨立祭當日なりし爾后手厚く信仰しつゝありしか昨卅四年初夏の頃他より一千圓の金子歸り來るありて我家に置も無安心なれば銀行に入置かんとて既に用意をなし居りしも時刻なれば喫飯を済ませ行かんとて膳に向ひたるにいつもに變りて午餐に酒の香たくなりしより異様に思ひたれど本心の命令に従へどの教に基き一杯酒を傾けたるに頃日の味とは大に異り甘味甚だしければ這は奇妙なり曾て斯かる事はなかりしにと又二本三本と呑み盡す内大に酩酊し其儘其場に打伏して遂に其日は暮たり女房は不用心な

り家業怠りなりとて賣けるも其儘醉臥して一夜を明かしたり斯くて翌朝
 眼を覺したるに是れまで斯かる意りはなかりしにと我身ながら点合行か
 ざりしか早々彼の一千圓を懐にし自己の預け入れんと志せし難波銀行へ
 駈付けたるに同銀行は預け金引出しの多き爲め支拂を停止し其日より閉
 行し遂に破綻するに至りたり若昨日此金を預け込みたらんには應に蛙の
 憂さ目みる可きを知すくの中に自然と斯なりて一時の損失を免かれし
 も全く太御神の御蔭なり我を離れし本心の浮みは天命なりとは此場なり
 けるよと自得せしかは爾來は層一層信仰の念厚く教旨を遵奉しつゝあり
 と近年大坂には珍らしき靈驗顯れて神徳に感ずるもの多してそ

明治卅五年七月廿七日印刷
 明治卅五年七月卅一日發行

(定價金參拾錢)

校閱者 山本貞治 郎
 三木惟一

編輯人 岡山市西中山下八十七番地
 守坂竹次 郎

發行兼印刷人 岡山市下出石町五番地
 大久保石太郎

發賣所 岡山市東中山下廿九番地
 國の教雜誌社

發賣所 岡山市下出石町五番地
 大久保翠琴堂

不許
 複製

靈 驗 集

り家業怠りなりとて責けるも其儘醉臥して一夜を明かしたり斯くて翌朝
 眼を覺したるに是れさて斯かる怠りはなかりしにと我身ながら点合行か
 さりしか早々彼の一千圓を懐にし自己の預け入れんと志せし難波銀行へ
 駈付けたるに同銀行は預け金引出しの多き爲め支拂を停止し其日より閉
 行し遂に破綻するに至りたり若昨日此金を預け込みたらんには應に蛙の
 憂さ目みる可きを知すくの中に自然と斯なりて一時の損失を免かれし
 も全く太御神の御蔭なり我を離れし本心の浮みは天命なりとは此場なり
 けるよと自得せしかは爾來は層一層信仰の念厚く教旨を遵奉しつゝわり
 と近年大坂には珍らしき靈驗顯れて神徳に感ずるもの多してそ

明治卅五年七月廿七日印刷
 明治卅五年七月卅一日發行

(定價金參拾錢)

校閱者

山本貞治郎
 三木惟一

編輯人

岡山市西中山下八十七番地
 守坂竹次郎

發行兼
 印刷人

岡山市下出石町五番地
 大久保石太郎

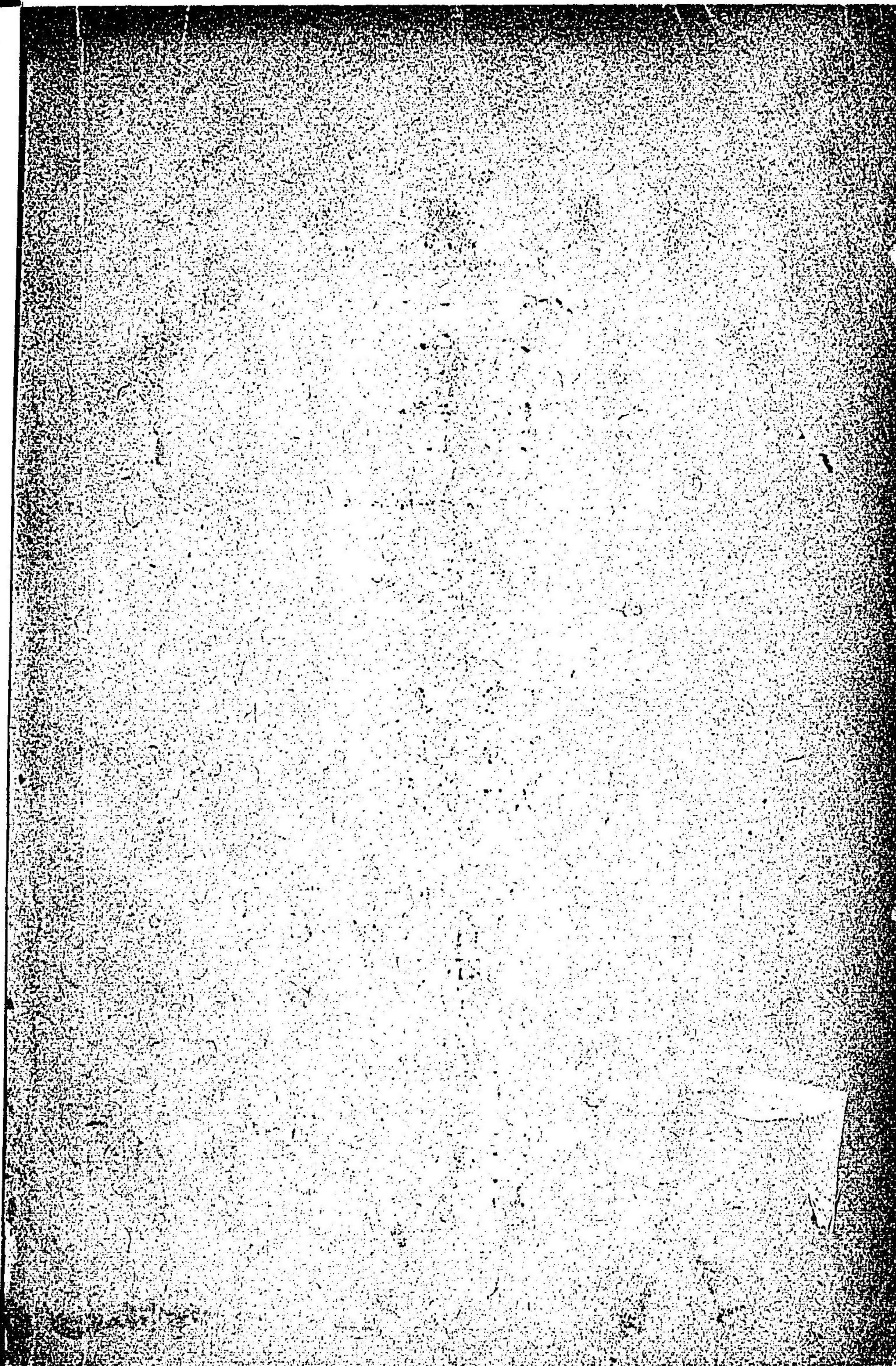
發賣所

岡山市東中山下廿九番地
 國の教雜誌社

發賣所

岡山市下出石町五番地
 大久保翠琴堂

不許
 複製



17

特18

718

靈 顯 集

2

国立国会図書館